

2013/4/16

「星めぐりの歌」を検証する

もう5～60年も昔になりますが、私は星に凝っていました。

天体望遠鏡を買い、天文雑誌を読み、四ツ橋にあったプラネタリウムにもよく通った自称「天文マニヤ」でした。

今でも私は星空を眺めるのが大好きです。旅行先で満天の星空を見られたときは感激します。

大阪市内でも満天の星空が見られます。それは中之島にある科学館のプラネタリウムですが、時折見に行きます。もっとも夜と間違えて途中で眠ってしまい、目が覚めたら終わっていたことがよくあります。

そんなわけで宮沢賢治の「星めぐりの歌」はとても興味があります。

でも歌詞の中に「ヘンや？」と思うところが所どころあります。

また屁理屈をいう、と叱られそうですがそれを承知で検証してみます。

◦赤い目玉のさそり～

南の夜空に輝き夏を代表するさそり座は、S字型のバランスのよい配列をしていて、誰の眼にもサソリの姿を連想させます。

「赤い目玉」は、ほぼ中心にある1等星のアンタレスを指し、火星に対抗する星という意味の通り赤い色で、星座ではサソリの心臓に位置しています。「目」の位置ではありません。賢治には元来、最も目立つ星を「目」としてとらえる感性があったようです。



さそり座

◦ひろげた鷲のつばさ～

わし座は夏の天の川の中にある星座で、その1等星のアルタイルは七夕の「彦星」あるいは「牽牛」として知られる星です。

また夏の星座をたどるときの手がかりとなる「夏の大三角」の一つの星でも

あります。

星座神話では、大神ゼウスの使いとして働いた大鷲の姿とされています。

星座絵もその翼をひろげた姿で、賢治もその感動し詩にしたのでしょう。

◦青い目玉の子犬～

「青い目玉」とは歌詞通りに考えると、子犬座の1等星プロキオンを指します。この星は平凡な恒星で黄色をしています。

だから「青い目玉」の星とは、直観的には大犬座のシリウスです！

シリウスは全天で一番の明るさを誇り、和名を「犬星」とか「青星」と呼びます。

だから犬とか青い星とくれば、迷わずシリウスを連想します。

「リリオだより」20号でもシリウスと書きました。

「青い目玉のおおいぬ」としたいところですが、語感がよくないので「こいぬ」にしたのだろうと思います。

◦光りの蛇のとぐろ～

星の輝きを「光り」と言っているのでしょう。へび座は頭と尾に分断されていて、その真ん中でへびつかい座に掴まれている形です。

賢治のいう「とぐろ」がないため不可解に思われることから、竜座とする説もあります。

ウィキペディアでは竜座としています。

しかし、天文に詳しい賢治が、竜座をへび座



わし座



大犬座



へび座とへびつかい座

と間違えるような初歩的な過ちをするはずがないので、ここはやっぱりへび座です。

◦オリオンは高くうたい 露と霜とを落とす～

オリオン座は冬の代表的な星座です。大きく明るい星が多いため、特に有名な星座です。中央に三つ星が並んでいるのが目印で、それを取りまく大きな四辺形をオリオンという巨人の狩人の姿に見立てた星座です。

「オリオンは高くうたい」というのは、東の空から高く昇ってくる様子を言っているのですが、特に明るい星が多いのであたかも ff で高らかに歌っているようです。

表現がうまい！やっぱり詩人ですね！

オリオン座が見え始める秋口から初冬までが露と霜が降りる季節と合致するので、それで露とか霜が降りるのはオリオンの仕業にされてしまいました。



オリオン座

◦アンドロメダのくもは 魚の口の形～

アンドロメダ座の M31 大星雲は、空が澄んでおれば肉眼で見えますが、魚の口に見えるほどはつきりは見えません。わが太陽系の属する銀河に最も近い銀河ですが、それでも 240 万光年のかなたです。

歌では「くも」と呼んでいます、この歌のできた大正 7 年（1918 年）当時、まだ星雲についての研究が進んでおらず、銀河も星雲も同じく星雲とされていました。それで「くも」と呼ばれました。

アンドロメダ座の M31 は銀河なので、最近ではアンドロメダ銀河と呼んで星雲と区別しています。



アンドロメダ銀河

◦大ぐまのあしを北に 五つのばしたところ～

ちょっと待ってなあ 賢治さん、それは違うで！

大熊座の足にあたる部分を 5 倍伸ばしたところに北極星（ポラリス）があるということですが、それはヘンです。

大熊座の腰にはまり込んでいるヒシヤク（北斗七星）の縁を 5 倍伸ばすと北極星です。まさかこれほど天文に詳しい人が、それを知らないはずがないので、詩情を損ねないようにあえて腰を足に言い換えたのだと思います。

同様なことがまだあります。

◦小熊の額の上は 空のめぐりの目当て～

ヒシヤクの縁を 5 倍伸ばしたところに北極星がありますが、そこは小熊の尾の先であって「小熊のひたいのうえ」ではありません。これも語感優先でしょうか？

でも納得できませんなあ。賢治の描く小熊座の絵は、逆さまになっていて額の上に北極星があるのかも知れません。

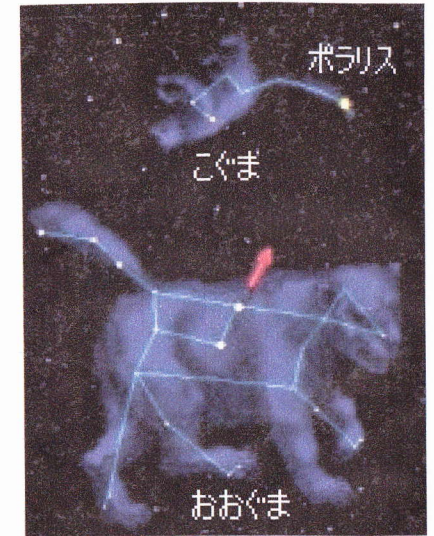
そうや！きっと。

このように検証していくと、ヘンなところがいくつかありますが、これらを間違いとしてしまうのではなく、語感優先のためにそのように表現したと考えたいです。

先日の中村扶実さんからの手紙を思い出しました。

歌詞の厳密な意味をゴジャゴジャ詮索せず、「感じるころ」を大切に、と。だから「青い目玉の子犬」の青い目玉は、大犬座のシリウスでいいのです。小熊のひたいの上に北極星があってもいいのです。そう感じるならば。詩とはそういうものですから。

亀岡弘志（記）



ヒシヤクの縁を 5 倍伸ばすと北極星



小熊座